アメリカシロヒトリ防除指針

12

1　アメリカシロヒトリ

(1) 防除方法

防除時期	防除方法	参考及び注意事項
（第１世代） ６月中旬 ～７月上旬	［耕種的防除法］ １　幼虫が小さいうちは巣網を枝ごと切り取って処理する。	○ 発生生態等を参考にして、発生初期から庭木等をよく見回り、巣網の早期発見、早期処分に努める。
（第２世代） ８月中旬 ～９月上旬	［薬剤による防除法］ １　幼虫が小さいうちに、発生している樹種でアメリカシロヒトリ又はケムシ類に適用のある薬剤を散布して防除する。	○ 適用作物が「さくら」、「プラタナス」、「樹木類」等に分かれているので、樹種に農薬登録がある薬剤を使用する。「樹木類」は、薬剤によって樹種や散布量が異なるので、登録内容を確認する。「樹木類」は、さくら及びプラタナスも含む。 ○ 同一系統（同じRACコード）の薬剤を連用すると薬剤抵抗性獲得の懸念があるので、ローテーション散布を心がける。 ○ 合成ピレスロイド剤は種類や人によって、鼻、のど、皮膚等を刺激するおそれがあるので、使用に当たっては十分注意する。 ○ 有機リン剤はアルカリで分解するので、アルカリ性の製剤(ボルドー液、石灰硫黄合剤など)との混用を避ける。

(2) 発生生態等

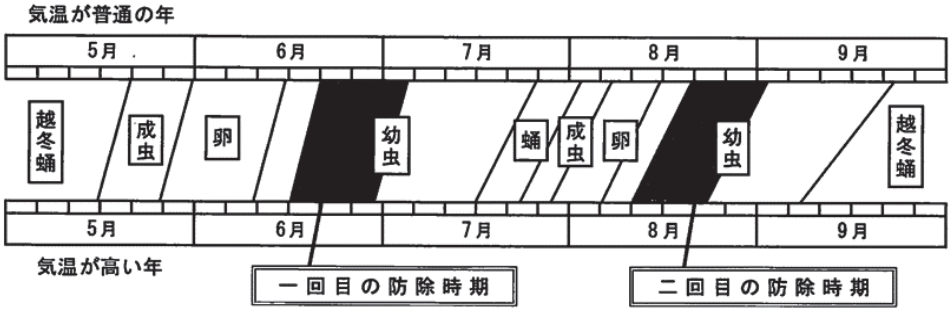
【被害の特徴及び周年経過】

幼虫は、多くの広葉の植物を食害し、300種以上の植物に寄生するが、発生は森林では少なく、街路樹や庭木で多い傾向がある。特に発生が目立つ樹種は、プラタナス、ポプラ、やなぎ、さくら、あんず、くるみ、くわ、かき等である。

幼虫はくもの巣のような巣網を張って、この中で集団で生活する。幼虫が大きくなるにしたがって大きな巣網をつくるようになる。1.5cm前後までの小さな幼虫(１～５齢)は、巣網の中の葉を網目のように食害し、中の葉を食い尽くすと、別の場所に巣網をつくり直す。この際ひとつの集団が複数の巣網に分かれることもある。２cm以上の大きな幼虫(６～７齢)は巣網をつくらなくなり、分散するようになる。このころになると太い葉脈だけを残して暴食するようになる。被害が著しい場合は、葉が食い尽くされ、木が丸裸になることも稀ではない。

本種は、蛹で越冬し、年に２世代を経過する。青森県における周年経過を模式的に下図に示した。

アメリカシロヒトリの一生と防除時期(模式図)



【形態的な特徴】

〈成虫〉　通常、屋根型に翅を閉じて静止する。体長は10～12mmである。体色は基本的には純白であるが、春に発生する越冬世代成虫(第１回成虫)の雄では、前翅に黒色または褐色の不規則な斑紋が見られることが多い。

〈卵〉　淡緑色、球形で光沢がある。卵は数百～千粒の卵塊として葉の裏に産みつけられる。卵は一層に産みつけられ、卵塊の表面には雌成虫の腹部の白い鱗毛が付着しており、これが本種の卵塊の特徴でもある。

〈幼虫〉　頭は黒いが、体全体は淡黄色であり、体の背中には黒い縞があり、体全体に白色の柔らかくて長い毛と短い黒色の毛が多数生える。老熟幼虫は体長30mm内外で、活発に動き回る。７齢を経過して蛹になる。

〈蛹〉　体長13～15mm、茶褐色で、樹皮の割れ目、浅い土中や周辺の材木の隙間等で蛹になる。